

## —海外で活躍する獣医師 (I)—

## 未 来 の 種 を は こ ぶ

柏崎佳人<sup>†</sup> (国際協力機構 ウガンダ「家畜疾病対策計画」長期専門家)

子どもの頃、「兼高かおる、世界の旅」という番組が日曜の朝に放映されていた。文字通り、兼高かおるという人が世界を旅してまわり、各国での様子を紹介する紀行番組である。その映像を見ながら朝食を食べるのが我が家の習慣で、父がサイフォンで入れたコー

ヒーの香りが漂う中、この同じ地球上に住む近境・辺境の人々の様子に目を光らせていた。「いつか自分も色々な国で暮らしてみたい」と、小学生の頃には漠然と思うようになっていたが、そもそもこういう感覚というのは生まれたときから近づいてくるものなのかもしれない。

もうひとつ、小さい頃から自分が思い描いていた将来像は、獣医師になることであった。当時は単に小動物臨床獣医師をイメージしていたのだが、小学校の卒業文集にはしっかりと「大きくなったら犬猫病院のお医者さんになりたい」と書いてある。幸いなことに獣医学部に進学することができ、漫画「動物のお医者さん」のような楽しい大学生活を送っていた。最終学年になり、同級生の間でも就職先の話が増えてきた頃、「海外に出たい」という気持ちがまた沸々と湧き上がってきた。「将来を決めなければいけない」という时限爆弾が働いたのだろうか。とはいっても、どのような形で獣医として海外に出たらいいのか、当時の自分には何の手がかりもなかった。

そんな時にふと思いついたのが、中学・高校の頃に母がよく話していた青年海外協力隊のことである。うちの母はちょっと変わった人で、ひとり息子の自分に「あんたも一人前になったら協力隊にでも行って人生経験を積んだらいい」と論じていた。当時は「何を言ってるんだ、この女は」としか思わなかったが、いざ就職が目の前に迫ってくると、それが俄然、頭の中で重みを増し、他に考えていた就職先の候補がどんどん色褪せていった。自分が望んでいた二つの願いが同時に叶うのである。海外で獣医師として働く。こんな一石二鳥的夢物語

を現実にしてくれる制度が、この官僚社会日本にもあったのだ。そう悟りを開いてからは何の迷いもなく協力隊応募に邁進し、晴れて合格。社会経験もないままに中近東のシリアへ行くことになった。

以上の経緯からもわかるとおり、自分が青年海外協力隊へ志願した理由は全く個人的な願望に根ざしたものであり、国際協力に興味があったわけでも、途上国の人たちを助けようという立派な志があったわけでもない。ただ獣医師として海外で働きたかっただけだ。そんな自分を受け入れる羽目になったシリアの配属先にとっては傍迷惑な話だが、本人は意気揚々で、3カ月間の派遣前訓練も存分に満喫し、当時の獣医学部長に饒別としていただいたジェームズ・エリオット（おそらくイギリスで一番有名な獣医師であり作家でもある）の本を片手にシリアへと旅立った。

本多勝一の著書「アラビア遊牧民」によると、アラブ文化圏は様々な意味で日本文化とは対極にあるらしい。当時、日本ではシリアについての情報などほとんど見つからず、物騒なイメージしかなかった。そのアラブの雄が自分にとって初めての外国となったわけだ。シリアでの配属先は、ハマという非常にイスラム色の強い街にある獣医研究所である。もっとも研究所とは名ばかりであり、自分が所属していた寄生虫セクションでの仕事は、ベドウィンのテントに出かけて採材をし、糞便や血液の検査をこなすだけだった。協力隊員の活動には具体的な目標や計画のない事が多く、目的意識をしっかりと持っていないと、ただ時間を浪費するだけで終わってしまう。それに危機感を持った自分は、何とかもう少し突っ込んだ検査を取り入れようと、情報を集め、マニュアルを作り、それを実践し、という作業を繰り返していった。

シリアで暮らした2年9カ月、私生活では様々な出来事の繰り返しであった。一方、研究所では、こなしていかなければならない義務が決められていたわけではなく、シリア人スタッフにとっても自分にとっても単調になりがちだった。しかし日々の仕事というのは多かれ少なかれ単調なものであろうし、その中で教えられたこと

<sup>†</sup> 連絡責任者：柏崎佳人 (A&M コンサルタント(有))

c/o JICA Uganda Office, P. O. Box 12162, Kampala, UGANDA

TEL +256-(0)414-254 326 FAX +256-(0)414-346 318 E-mail : yk8@mac.com



ハマ市にある羊の市場。毎朝開かれており、隊員の頃はよくここへ採材に出かけた。写真は購入した羊をトラックに積み込んでいるところ。

も非常に多い。

赴任した当初は研究所の所長とよく口論になった。理由は簡単、約束を守らないのだ。アラブ人が約束を守らないのは普通のことである。彼らには、約束をしないで断るよりも、とにかく約束をして相手を喜ばせることが良いことだと考える風潮がある。道を聞かれた時でも、相手を喜ばす為には知らなくても適当に答えるのがアラブ人なのだ。そんなことはこれまで何度も言われてきたし、それまでの経験を通して自分の頭の中でもよくわかっているつもりだった。しかしそれでも約束を破られると頭にくる。たいした約束でもないのに、それが守られようと守られまいと大勢に影響はないとわかっていながら、それでもやっぱり気に障る。この、「頭で理解していること」と「心で感じる気持ち」のギャップは、理性や知性だけでは埋めようもないほど深く（もともと持ち合わせていないという意見もあるが）、特に最初の一年間は腹が立ってくやしくて眠れない夜が続いた。

一度こんな事があった。ラマダン（イスラムの断食月）を迎え、自分も職場の同僚に倣って日中の断食にトライしていた。その日は木曜日、翌金曜が休みなので夕方バスに乗って北部の街アレppoへと向かった。当時はラマダンが5～6月と夏至に近い時期であったので、バスの中は冷房がかかってはいたものそれでも結構暑く、乗客は皆、水も飲めずにイライラした様子であった。そのバスの一番前に4～5歳の男の子を連れたキリスト教徒らしい女性が座っていた。男の子はなかなか大人しくしてられない様子で、バスの通路を前後に行ったり来たりしながら歩き回っている。

そのうちに自分の真後ろに座っていたおばさんが、その男の子を膝の上ののせて遊ばせ始めた。その子は前に座っている日本人の存在に気がつき、自分の気を引こうと襟足の毛をくすぐったり息を吹きかけたりし始めた。大人気ないと思いながらも、とても子供の機嫌を取るよ

うな気分ではなかったので無視を決め込んでいた。ところがその子はやめない。仕方なく手で払って嫌がっている素振りを見せたり、後ろを振り向いて抱きかかえている女性をにらんだりしてみたのだが、その女性は男の子を注意するでもなく、したままにさせている。そのうちに今度は「アナ・ヤーバーニー（僕は日本人）」という日本人をからかう唄さえ歌い始めた。しかも自分の耳元に顔を寄せてである。

暑さと断食のストレスも手伝って怒り心頭に達し、すくっと立ち上がって後ろを振り向き、「いい加減にしろ」と怒鳴ってその子に手を挙げてしまった。頭を平手ではたいたのだが、その勢いで頭が窓ガラスにぶつかり、自分でもびっくりするくらい鈍い音がした。インパクトの瞬間にヘッドがクルリと回転するのだ。あーあ、やっちゃった。その子は大声を上げて泣き始めた。抱いていた女性は何て事をするんだとばかりにののしり始める。自分とはにかく思っていた不満をぶちまけ、あとは席に座ってだんまりを決め込む。これ以上アラビア語で口論しても勝てるはずがない。しかし「沈黙は金なり」のヘッドロックはなかなか効かない。バスの中は蜂の巣をつついたような騒ぎになり、すべての乗客が敵になった。その子の母親もやって来て文句を言い始める。アレppoに着いたら警察を呼ぶとも言い出した。「警察かあ、事務所（現JICAシリア事務所）に連絡がいくだろうなあ。それでなくても俺は問題が多いのに。」などと思いを巡らせながら、「早くアレppoに着け着け」と願っていた。

と、その時、前の方に座っていたひとりの若者が立ち上がった。彼はその母親に向かって彼女のしつけがなっていないと非難を始めた。

「ラマダン中でみんなイライラしているときに、子供が騒いでいても知らん顔。そしてしまいには子供を他の女性に預けたまま自分はいい気に寝ている。ここはお前の家じゃないんだぞ。」

これが抜群のカンフル剤になり、母親はバツが悪そうに子供を連れて自分の席に戻った。バスの中も潮が引くように静けさを取り戻し、やっとカセットテープの音楽が耳に入るようになった。

「うわー助かった」と、一気に緊張が解けて気が楽になった。理由は何であれ子供を殴ったのである。言い訳は通用しないし、それ以前にアラビア語でうまく説明できる自信もない。しかもその子が僕にしていたことなど誰も気づいていないのだ。九死に一生を得たとはまさにこのことであり、その一方で「自分の味方になってくれる人というのはどこにでもいるんだなあ」と、いたく感激した。バスがアレppoに着いた後、その青年を捕まえてお礼を言ったのはもちろんである。彼は何でもないとだと言っていたが、自分にとって彼の行動はとてつもなく大きな意味を持つものだった。

旅行をしている時は気持ちもおおらかであり、まわりの人間の小さなルール違反などは許せるくらいのゆとりが心にある。また自分をはっきりアウトサイダーと認識しているので、ある程度の引け目からか、そういう気分にはさせられるのかもしれない。ところが一旦住み始めると話は別である。その土地の習慣に染まっていくうちにアウトサイダーという気持ちは薄れ、自分もその土地の人間であるという認識が生まれ、小さな欠点にも目が届くようになる。すると自然に不満も多くなり、まわりの人間のルール違反が気になりだす。これは別に心にゆとりがなくなったからではなく、「生活する」という行為から生まれる当然の成り行きだと感じる。あのバスの中での出来事にしても、もしも僕が旅行者だったらきっと我慢できていただろう。長い間ハマで生活し、色々なストレスを抱えていくうちに、それがどこかで爆発してしまう瞬間というのがある。しかしそれを理解してくれる人間がいるというのも事実で、だからこそ救われるのだ。

赴任してまだ間もない頃、ハマ郵便局の局長とけんかをしたことがあった。手紙を渡す渡さないで口論になったのだが、最後に彼の胸を小突いて捨てぜりふをはき、バスに乗ってアパートへ戻った（こんなことをしているからJICA事務所に連絡がいくのだが）。するとアパートの入り口に佇んでいた隣人がニヤニヤ笑って、「お前、郵便局でけんかしたんだってなあ」と言ったのには驚いた。シリアでは噂が伝わるスピードは市営バスの速度よりも速いのだ。当時の在シリア日本大使が、「シリアではわざわざ予算を使って宣伝をする必要などありません。そっと近くの人々の耳元にささやくだけですぐに話は広がりますから。」と冗談交じりにおっしゃっておられたが…うーん、本当にその通りだなあとアラブ世界の人間関係の強さを改めて認識した。

これらシリアでの経験を通し、頭にシュマーフ（アラブ男性の頭を覆う布）をかぶりガラビエを着たむさ苦しい男達から、仕事の面でも生活の面でもどれだけ多くのことを学んだかはかり知れない。とくに人とのつき合い方という点で、日本文化と対極にある考え方を持つ人たちとの生活は、心の奥底にあった何かを目覚めさせてくれた。それは一対一の人間関係にこそ文化交流や国際協力の原点があるのではないかという思い。けんかをしようが頭にこようが、見知らぬ人々との生活には心躍る何かがあることを実感した。幸いにも自分には獣医という武器がある。これを使ってこれから先も国際協力という仕事を続けていけたら…と、自分の進むべき道がようやく見えてきたのは帰国が間近に迫った頃。やっぱり時限爆弾が働かないと自分の気持ちが固まらないのだ。日本に帰ってから取り組むべきハードルを心に並べ、愛しのシリアを後にした。

日本に帰ると現実が待っていた。「今後も海外で働きたいのですが」と諸先生・先輩方々に相談すると、ほとんどの人は口を揃えて「何馬鹿なことを言ってるんだ。早く就職先を決めて結婚でもしろ。」とおっしゃった。しかしこういうことを頭ごなしに言われると反抗したくなるのが愚かな人間の性だ。だいたいシリアを出る時点で次に何をするかはもう決めていたのだから、「それぐらい察しろよ。人の気持ちは常識の外側にあるんだぞ。」と心で呟いていた。一応相談をしたのは、自分の気持ちが本物かどうかを確かめたかっただけなのだ。最終的には自分で決めないと何も動き出さないのはわかっていた。反対されて逆に心が固まったようなところもあり、留学をして博士号を取ることにさっさと決めてしまった。

そうなる問題は資金である。留学するには金がかかる。かといっていい歳をして親に出してもらうわけにはいかない。となると奨学金をもらうしかない。そこで狙ったのがJICAの海外長期研修制度である。これはJICA職員や省庁の国家公務員を対象とした奨学金で、海外で2年間勉強させていただけるというありがたい制度だ。幸いなことに協力隊経験者に対しても門戸が開かれており、協力隊事務局の推薦で応募できる。この受験のために約1年間準備をし、試験を受けた。ついでに受けた「世界青年の船」に一足早く合格し、ハワイへ向かう船の上で海外長期研修の合格電報を受け取ったときは、運命の中に吊るされていた極上の札が自分の手元に舞い降りてきたような気がした。これで自分の将来の方向性がだいたい決まってきたのだ。

過去の家畜衛生分野における技術協力プロジェクトを調べてみると、その多くが動物用ワクチンの製造か家畜感染症診断技術の改善であった。それゆえ、この二つを天秤にかけて後者の勉強をすることに決め、留学先としてリバプール大学の医学部に附属する世界で一番古い熱帯医学の学校を選んだ。取り組むことにした病気は人獣共通感染症であるトリパノゾーマ症で、研究の詳細は自分次第ということになった。

日本の大学院では教室によって研究の流れというものがあるため、リサーチの学生はその中に組み込まれるのが普通だ。つまりその研究室として取り組んでいる研究テーマの一部を教授から与えられ、それを進めて論文にまとめていくのが普通だろう。しかしここでは違った。自分で考えなくてはならない。それから約1カ月間、教授に渡された一本の文献を出発点に、図書館で膨大な数の論文を読む日々が続いた。図書館で囁きあうようにおしゃべりをする他の学生に、「うっせえな、静かにしろよ」と怒鳴りたくなる気持ちを抑え、コピーをしては読み、疲れると講義室へ出かけて行ってポケーツと寄生虫や衛生の話に耳を傾けた。

そうこうするうちにそのトリパノゾーマ症という病気の全体像がぼんやりと頭に浮かんできた。まんざら自分も馬鹿ではなかったようだ。とホッとひと安心。いったんその病気に由来する問題点と、世界で進められている研究の状況がわかってくると、あとは早い。その解決していない問題の中から自分にとって一番興味のある部分を選ばよいいのだ。自分の頭の中に出て上がった研究のストーリーを文章にまとめて提出し、何とか教授のお許しを取り付けて長かった図書館生活に別れを告げた。

イギリスに来て2年半が過ぎようとしていた。日本にいる友達の間では「柏崎はアングロサクソン人にいじめられて落ち込んでいる」という噂が流れていたようだが、単調ながらも考えさせられることの多いリパブル・ライフを思いのほか楽しんでた。金曜の晩は研究室のスタッフとバブをハシゴし、クラブで踊って息抜きをする。実験の方も順調に進み、開発に取り組んでいた診断法は先が見えてきた。教授との当初の約束通り、診断法のフィールド・トライアルを実施するため、2カ月間ウガンダへ行くことになった。

空から見るウガンダは緑一色だった。腕まくりした心にしみこんでくる鮮やかな緑だ。チャーチルがウガンダのことを「アフリカの真珠」と呼んだという話は前に聞いたことがあったが、確かに美しい国である。昔読んだ本の悪名高きアミン大統領のイメージしかなかった自分にとって、この飛行機の窓から見えるまぶしい光景は予想だにできなかった。かつて恐怖政治が行われ、理不尽な暴力によって支配されていた国は、今この豊かな緑の中にあって再びよみがえりつつあるのだろうか。人間の生活力も自然の生命力に負けてはいるまい。飛行機がエンテバ空港に着陸して外に出ると、まるで未来の種を運んでくるかのようなさわやかな風が、大地の上をやさしく吹いてきた。

さて、ここウガンダでの調査はケニア国境東部の街トロロにあるウガンダ・トリパノゾーマ症研究所 (UTRO) で実施することになった。トリパノゾーマに特化した研究所で病院も併設されている。建物は立派であったが中味はお粗末。こういう国はどこも財政難で、研究所につく予算などほとんどないのだろう。しかし驚いたことに学生は自分ひとりではなかった。アメリカのコネル大獣医から2人、イギリスのケンブリッジから4人が来ていた。全員女性だ。コネルでは希望する学生を海外へ研修に出す制度があるらしく、その年は彼女たち2人が選ばれてウガンダに来たのだという。ケンブリッジからはその前年にも数人のグループが訪れている。自分たちでデザインしたオリジナルT-シャツを売って資金を稼ぎ、研修に来たのだそう。そしてその年のケンブリッジ女性4人組は、いくつかの企業を回ってスポンサーを見つけ、渡航資金を工面したらしい。日本の獣医学部に



イギリス留学中にウガンダのトロロ近郊で実施した野外調査の風景。東部の一般的な牛は体格が小さく、力づくで倒して採血する。

もそんな研修制度や、こんなことを考え実行する学生がいるのだろうか、当時は大きな意識の違いを感じた。

さて、サンプリングの様子はこんな感じであった。採材を行う場所は小学校の校庭である。泥で塗り固められた小さな校舎の前に青々とした草をたたえる校庭が広がり、そこに農家のおじさん達が牛を連れてくる。UTROのスタッフは校庭の一角に根を張るやさしそうな木の下に荷物を広げ、大方の準備が整ったところでいざ開始とあいなる。まず農家のおっちゃん達が力づくで牛をなぎ倒す。するとマーカーを持ったスタッフが牛のケツに番号を書く。そこへ血を採る人がトコトコ出向いて採血をする。採った血液は、容器を並べたトレイを持っている人に渡し、番号を伝える。その人は容器に血液を入れて番号を書く。血液の入ったサンプルを受け取った人は、その血液をひとつずつヘマトクリット管に流し込み、遠心する。遠心が終わったら今度はそのヘマトクリット管を番号順に顕微鏡検査係に渡していく。顕微鏡検査係は受け取ったヘマトクリット管を10～15本ずつスライドグラスの上に並べ、バフィーコートあたりを鏡検し、トリパノゾーマ原虫の有無を調べる。陽性が出ると牛の番号を呼び、その場で治療を行った。というわけでざっと10人近くの人間が必要なのだ。

このチームによる流れ作業は非常にうまく機能していた。いたく感心してしまった。自分は採血を担当していたが、あちらこちらからひっきりなしに声がかかり、のんびりと流れる雲を見ている暇などなかった。多い日には500頭以上も採血をし、持参した検査キットを試していた。

子供の頃から思いを巡らせていたアフリカは、それだけ先入観の多い場所でもあった。ジャングルとサバンナ、貧困に飢餓、エイズとマラリア、野生動物に原住民、政治腐敗と人種差別、等々、どれもこれもテレビや本から植え付けられたアフリカ像が自分の頭を埋め尽く

していた。そしてウガンダにやって来た。目に飛び込んでくる光景はこれまでテレビで見ていたものとあまり変わらない。もちろんその色彩や匂いや温度を肌で感じる事ができ、それらが体にしみこんでくる感覚は異なるが、イメージとしてそれほど大きな開きはなかった。しかし人々から受ける印象は格段に違った。2カ月という短い期間にせよ、彼らと同じ村に住み、同じものを食べ、同じ場所で仕事をし、同じ言葉で話していると、ここで自分が接したひとりひとりの人間は、それまでの人生で接してきたひとりひとりの人間と大して違わなかった。考え方や人のつき合い方が全然違うだろうという自分の予想に反して、それは取るに足りない差だった。

彼らは貧しいかもしれない。しかし少なくとも僕の間には彼らが惨めな生活をしているようには見えなかった。それは僕が付き合ったひとりひとりのウガンダ人から受けた印象であり、気持ちの上でのつながりを持ったからこそ感じえた思いだろう。しかし社会から受けた印象はまた少し違っていた。それはつまり、個々から感じられるような気持ちが社会全体からは酌み取りにくいからかもしれない。いずれにしろ社会としてウガンダは非常に貧しく見えた。シリアではついで感じ得なかった貧しさというものが、この国ではそこそこで目についた。多くの人々が生きていく社会として未完成な部分が多すぎるのだ。衛生、通信、交通、社会制度、インフラ、産業、教育、等々、数え上げたらきりが無い。そしてそれらの分野での開発を援助するため、欧米諸国がこぞって大金と人材を投入してきたにもかかわらず、アフリカの状況は一向に改善されなかった。何故アフリカは辛酸をなめてきたのだろうか。

ひとつ感じたのはアフリカ人自身の中にある素養という能力の問題だ。能力といっても頭の良し悪しを言っているのではなく、組織だった持続的努力を必要とする開発援助のような仕事ができるかどうか、という意味で、である。個々人の知的レベルはかなり高く、実際イギリスで会った多くのアフリカ出身者は話題が豊富で、かつ話が面白かった。しかし彼らは往々にして他人の行動に対し批判的な態度を見せるものの、自分から積極的に物事にに関わり改善していこうという主体性に欠けていた。彼らは常に傍観者となり、面倒なことには積極的に参加しない傾向があった。こんな素養を持つ人が多い組織においては、何か活動を始めてもすぐに批判ばかりが渦巻き、まとまりがつかなくなってしまう事だろう。自分たちの国や社会の開発を進めていく上で、主体性を持って関わろうとする人が少なければ自ずと結果は見えている。私利私欲に走る人が多ければなおさらだ。そうしてアフリカは長年にわたる欧米の援助をスポンジのように吸い取り、それに見合う結果は生み出されなかった。その原因は援助国側にも被援助国側にもあったのだと思う。

この2カ月間、沢山の思いが交錯し、色々なことを考えた。今回、自分が行ったフィールド・ワークのように、学生を海外へ送って現地のスタッフとともに研修なり研究なりをさせるというのは非常に良い制度だと思う。コーネルからやって来た2人しかり、ケンブリッジの4人組しかり、彼女たちがウガンダで経験したり感じたりしたことは、帰国してから彼女たちの中で大きく成長していくことだろう。単に旅行をして得た経験とは質も重みも違うはずだ。学問的には取るに足りないことかもしれないが、人間としては大きな糧になったはずである。

なぜ日本の大学ではこんな簡単な交流ができないのだろうか。教員が引率するような研修旅行ではなく、学生だけで送り出す海外研修をさせるべきだ。途上国にはこのUTROの様な研究所が沢山あり、日本から学生が研修に行きたいと申し入れれば喜んで受け入れてくれるだろう。そしてそういった場所で培った経験は少なからずその人間を成長させ、将来、開発援助に携わろうと意気込む若者を育てていくに違いない。長いことイギリスに住んで、サービスの悪さに文句を言い、食事のまずさを嘆き、天気悪さに難癖をつけていたが、こればかりは感謝しなければいけないと心から思った。

イギリスに戻ってから論文を仕上げ、何とか博士号を取得して日本へ帰国。JICA 専門家として働くチャンスが巡ってきた。それから約10年間、タイ、ウルグアイ、ベトナム、マレーシアへ赴任し、主に診断技術の改善を主眼とするプロジェクトに従事した。マレーシアでの活動の後、仕事に対しマンネリ気味になっていた自分をリフレッシュしようと再度イギリスへ渡り、環境生物学の修士課程で勉強。帰国後は再びJICA 専門家として活躍する機会をいただき、タイ及び周辺国における広域プロジェクトへ赴任した。そして現在は14年ぶりに因縁のウガンダへ戻り、家畜疾病対策計画という小さなプロジェクトを任されている。

このプロジェクトは「家畜疾病診断能力の強化を通じて、ウガンダ国の家畜疾病対策の体制を強化する」という目標の下、中央における診断・検査機関である家畜疾病診断・疫学ラボラトリーの機能改善と、県獣医事務所との連携強化を2本柱とした活動を行っている。こう書くとも聞こえはいいが、実際、プロジェクトが開始された9カ月前には、ラボは惨憺たる状態であった。スタッフも技術者ばかりで獣医師がおらず、やはり知識の点で不安があった。

診断技術の移転を始める以前に、そのような環境を整備する必要があると感じ、この半年ばかりはそういったマネジメント業務に追われてきた。最近になってようやく診断棟の改修が終わり、機材が入り始め、何とか技術移転を始められる出発点にたどり着いたところである。

県の獣医事務所は若干様相が違っていた。政府が進めてきた地方分権化政策により、それなりの数の獣医師及び家畜衛生スタッフが配置されている。事務所によっては小さなラボを併設し、細々ながら簡単な寄生虫検査を実施しているところもあった。少し手を加えて少額機材を供与すれば、県事務所のラボはすぐに動き出すだろうと感じ、その役を協力隊の隊員に託してみようと考えた。というのは協力隊も進化の過程をたどっており、何年か前から短期派遣という制度が導入されていたからだ。これはかなり柔軟なシステムで、任期の設定が自由、かつ募集から赴任までの期間が短いときている。幸いにもJICAウガンダ事務所がこの制度の活用に積極的であったことから、すぐに4名の短期派遣獣医隊員の要請を上げた。ターゲットは院生だったのであるが、ありがたいことにプロジェクトの国内支援機関である日本大学生物資源科学部が3人も送り出してくれた。またうれしい誤算であったのは、何の前知識もなくネット上の公募を見て応募してくれた方がひとりいたことで、これであらう募集をしていた4人全員が揃い、めでたしめでたしということになった。

なかなか個性的なこの4人の顔ぶれは、しっかりした姉御肌のNさん、一見まじめ青年風だけどやることは大胆なHくん、野生児タイプなくせに意外とマメなMくん（以上日大）、そしてベテラン獣医師でありながら現在は宮崎大の博士課程に在籍する妻子持ちのKさんである。プロジェクトとしてこの4人に課した宿題は3つ。各事務所の簡易診断ラボで血液検査と糞便検査ができるようにすること、ブルセラ病と結核病の調査をすること、そして各県の家畜衛生情報を集めることだ。必要な機材や試薬類はもちろん供与し、各人は別々の県獣医事務所に配属され、現地スタッフと共に7週間の活動を行った。サンプリングの方法やラボのアレンジなどは各人の裁量に任せていたため、それぞれが工夫を凝らし、各県で違った感じに仕上がっていった。

配属されてしばらくは何かとゴタゴタしていたようで頻りに電話がかかり、手元の携帯が鳴る度にドキッとしていた。が、2週間もすると落ち着いてきたらしく、携帯が鳴る回数も減り寂しくさを感じるようになった。このウガンダでの2カ月間が、彼らにとって短かったのか長かったのか、楽しかったのかつらかったのか、刺激になったのか退屈したのか、ウガンダを思う気持ちは膨らんだのか否か…自分にはよくわからない。しかしきっとポジティブな何かを感じて日本へ帰ってくれたことと思



昨年、キボガに赴任した協力隊短期隊員が実施した採材の様子。キボガはウガンダ西部に位置し、このあたりには長角種であるアンコーレ牛が多い。農場も東部に比べて大規模であり、多くの農家が追い込み柵を持っている。

う。そんな彼らの活躍についてはプロジェクトのホームページをご覧ください (<http://homepage.mac.com/yk8/ADC-UG/index.html>)。ちなみに隊員の短期派遣については今後も随時要請を上げていく予定である。

協力隊員としてシリアへ赴任し、彼の国の人たちに自分の未来の種をもらった。それ以来、自分も誰かに未来の種を運んであげられるようになったらと思い、この仕事を続けている。人の熱い気持ちに弱い君は、もしかしたらこんな仕事に向いているのかもしれない。

## 略 歴

1982年北海道大学獣医学部卒業。1984年同大学大学院修士課程修了。1984年から1987年にかけて青年海外協力隊獣医師隊員としてシリア・アラブ共和国ハマ市の獣医研究所寄生虫学研究室にて活動する。1989年から1993年にかけて国際協力機構（JICA）海外長期研修生としてイギリスのリバプール大学医学部附属熱帯医学校博士課程に在籍。博士号取得後、特別嘱託としてのJICA本部勤務を経て、「タイ国立家畜衛生研究所プロジェクト・フェーズⅡ」（1994年から1998年）、及び「ウルグアイ国立獣医研究所強化計画」（1999年から2001年）に長期専門家として技術指導を行う。また、短期専門家としては「ベトナム国立獣医研究所強化計画」（2001年から2002年）及び、「動物におけるニパウイルス」ミニ・プロジェクト（マレーシア、2002年から2003年）に携わった。その後、イギリスのセント・アンドリュース大学環境生物学修士課程に1年間留学し、環境生物学の修士号を取得。帰国後、A&Mコンサルタント(有)に所属する傍ら、再びJICA長期専門家として2004年より2年間「タイ及び周辺国における家畜疾病防除計画」に関わる。2007年3月よりウガンダ共和国へ赴任し、「家畜疾病対策計画」に従事。